

詩時評

第28回

ひとつの詩でもあった

松本衆司

今年の春四月のことだが、社会学者の大澤真幸が師と仰ぐ見田宗介の死を悼む文章を朝日新聞の文化欄に寄稿されていた。「美しく無駄のない先生の文章は、ひとつの詩でもあった。詩人の直観と科学者の堅実性。二つの才能をもっている学者は稀である。しかも見田先生の場合、二つが融合し、完全に一つになっている。」この賛辞がなんらお世辞ではなく、心底の思いだということが、全文に漂っていた。敬愛する二人の関係の素晴らしさがこのような惜別の言葉を生み出したのだ、と改めて追悼文を読み直し、実感する。

江口節詩集『水差しの水』（編集工房ノア）を読む。「あの街この街」を引く。

あの街を走る電車の／窓から見えるのは／あの街ではありません／手を振っているでしょ？／リュックを背負った横縞シャツの男の子／ちらつと目が合ったのは／地下鉄の駅に向かう紺色のジャンパーの学生／古道具屋で品定めしている青年のそばへ遅れて／少し若い私が歩いていく／街角を曲がれば／さっき　そこにいた気配が確かに有って／あの街を走る電車の／窓から見えるのは／あの日から変わらぬこの街です

詩人の精神性はどのような現実を生きようが、ぎりぎりの瀬戸際でいのちと向き合い、いのちの仕種と向き合うこと、と若い頃の読書で某詩人の言葉から学んだ。江口節の詩の世界に魅かれるのは、その精神性の見事さ故である。

山田兼士詩集『ヒル・トップ・ホスピタル』（山響堂）を読む。タイトル詩を引く。
第二連三行目から

急激な高熱で救急搬送されたのは二年半前
／髄膜炎で二週間のICU　それから一ヶ月半／ヒル・トップ・ホスピタルで過ごし
たが、何の記憶もない／北摂の転院先で

五ヶ月間リハビリをして／コロナ禍の中なんとか社会復帰を果たして二年／と思った矢先　まさかの食道癌で緊急入院／今度は意識がはつきりしているのでよくわかる／命の行方にも自覚的だ　五年生存率は十二％／伝説の山から昇る朝日が病室を照らし／神話の島に沈む夕日が廊下を照らし／まるでこの建物が明るい冥府のようだ／一度黄泉がえった命は　もう一度甦るのだから／ヒル・トップ・ホスピタルの東の空に／伊吹の山で電に打たれ　能褒野の地に斃れ　白鳥になったタケルの魂は／二上山を越えてここ古市の里に降り立った／やがて舞い上がって／西の空へと消えていったという　ということは／タケルにとつてこの土地こそが冥府だったのかもしれない／夏至近く　点滴チューブに繋がれて／体内にカテーテル・ポートを埋め込まれ／飲食をしないまま二週間が過ぎた／生の余韻かもしれないこの二年を振り返っている／ヒル・トップ・ホスピタルの五階の部屋

五頁B六白の小さな詩集である。表紙の横書きのタイトルと山田兼士の名の下に朝焼けの二上山の写真。「山田さん、素晴らしい詩集だよ。」と、語りかけたい。私もこの病院の六階に入院したことがある。故に、彼の

筆力に一層魅せられる。

平居謙「短詩系文藝四重奏Bomb」(草原詩社)を読む。詩集・句集・歌集・川柳作品集の四冊が箱に収められている。歌集『星屑東京抄』『白鷹薬師町』の冒頭を引く。

俺は短歌を持って街を切り取ろうとしている。短歌はよく切れない鋸。短歌を作り慣れない俺にとっては。数か月前、以前作った「一つの風景」の街を歩き直し「熱風」という別の詩を作った。詩という形に作り上げた風景Ⅱ詩をもう一度歩くとはどういうことかを突き詰めたかったからだ。その後、俺は二〇二〇年現在の流行り病のような短歌たちに怒りを覚え、自分自身の短歌を今年だけ書いてみることにした。それならば、このよく切れない鋸で世界を斬るとどんな音階が流れるのか。／そのためには、短歌を以ても街を歩かなければならない。が、そのように考えた途端、得体の知れないような圧迫感が俺を襲ってきた。街の圧迫。

ここに平居謙のこの試みの意図をみる。そして、この歌集の冒頭の歌を引く。「もしかしたらまだ東京にいるのかと思って星屑集めたりする」ここにもまた平居さんの真実があ

る。形式は問わない。

なんどう照子詩集「白と黒」(土曜美術社出版販売)を読む。「クローゼット・でず(あるいは閉じ込められた死)」を引く。

こうしてじつと／未来の方をみつめていると／自分が静かに死んでいくのが見えてくる／しろくほろほろとけながら／何でもないものになっていくのを感じる／ほろんでいく重力で／生きていることをだれもしらない／自身でさえもしりえぬうちに／死んでいることのうえに／はりついていいるはかない生／一生のうちの一日の一瞬／ヨガ教室のマットの上で／シャバーアサナ 死体のかたちになる／自分のなかのおくのほうにいる／死に近づいてみる／呼吸が波のようになりいきする／生きているのは／呼吸だけなのかもしれない／ある方向に時間がいくと／小枝に花が開いて／わたしがもどってくる／生きているということのかりそめの／日常にかえされて／パンを食べたり キリンビールを飲んだり／血のしたたる肉をむさばり／映画「悪童日記」を覗きにいったりする／けれど ときどき／くたびれたシャツになつてくずれおれたまま／ほこりのたまったクローゼットの奥のハンガーに／ぶらさがっている日もある／次

の日にはそんなシャツが死の袖に腕をおとし／かりそめの生をまとして／出かけていく

人間は誰もが生き死にのぎりぎりのところに立っている。そこで家族の幸せのためにそのいのちを削っている。その営みが暮らしてあり、そこにさまざまな凹凸がある。なんどう照子はその凹凸の場面を豊かな感性とリアルな描写力で見事に切り取る。

岩井昭詩集「詩片233」(なすき書房)を読む。「おにやんまのなつ」を引く。

おにやんまが／うでにとまったよ／うでは／ぼうきれになった／みはらしだいになつた／じかんもとまっている／そしらぬふりして／じつとみたよ／しらないほうがわかりあえる／おにやんまはキヨロキヨロ／あおぞらとにゆうどうぐもがみている／それ・か・ら／こんなこと／はじめてだから／どうしていいかわからない／ほくはきえたよ／すずしいかげがとおります／いつまでも／ぼうきれにとまっていてほしい／みはらしだいにとまっていてほしい／きおくにとまっていてほしい／そしらぬふりして／いるから

時々思い浮かべた詩のひとつひら、ひとつひらと並べてみたら、こんなになったというところか。二三篇の詩が二段組で収められている。なるほど、生きることには詩はある。この詩集に改めて教えられる。

種村宏詩集『命のカレンダー』（澤橋）を読む。「でんやまっか」を引く。

でんやまっか／でんやまっか／でんのでん／でんやまっか／でんやまっか／でんの でん／呪いをかけた／カードを呪み／勝負！／勝負！／パンデミック／パンデミック／パンノパン／パンデミック／パンデミック／パンノパン／パン／ゲーム機操り／素早くタッチ／／コロナを殺せ／コロナを殺せ

「そんでんねん、もうかりまっか」の関西弁から「でんやまっか」だろうか。そんな軽妙な呪文に真実がこもる。詩もあれば、わび、さび、風俗の匂いも漂う。西鶴の矢教俳諧のことを思い浮かべた。一晚に四千句、そこ人々の生き様が洒落て描かれる。

橋爪さち子詩集（新・日本現代詩文庫）を読む。「微粒子になる」（八六年発行詩集

『時はたつ時はたたない』所収）を読む。

地球が回転をかさねると／子宮の周期も私を回転していく／数十世紀にわたる羊水は／子どもを無限につつみ吐きだしてきたのだし／海水は悠然と満干を繰り返してきたのだ／宇宙は収縮し膨張し／地球の女たちは／天体と同じ律動を抱いて生きてきた／女たちは お臍で宇宙とつながっている／私は子どもを従えたまま／街を突き抜け海を横切り地球を飛び越えて／他の惑星に至るまで歩きつづけていけるし／砂漠に横たわって太陽とも交接できる／／素早い朱が天空を染める朝は／私の内臓も新しい血液で溢れる／けれど／地球は永遠に宙を浮きつづける星と知る時／私はただよう星に／耳環のようにぶらさがりながら／地球と同じくらい孤独だ／／地球は／虚空の闇に深くつつまれていることや／触れない宇宙の壁のあつさを想いながら老いる／私は浮遊する星を浮きながら／遠い日 子宮の壁をたたいていたことや／二人の子どもをおなかにつつんでいたことを／想って老いる／宇宙の闇と羊水と どちらが苦かった？／孤独は孤独を生む／女たちは浮きながらつつみ／つつみながら浮いてきたのだ／／風は海の向こうから絶え間なく／死者たちの伝言を運んでくる／辿れない距離を辿るうちに／風は実体になるだろう／女たちは

／はらかな生誕への道のりを辿りながら／宇宙を響く祈りの微粒子になる

男に「男」性が、女に「女」性がある。それは生命を引き継ぐ生物としての性差に基づく。その男には近づけない異質な「女」性の究極の感性とその独特の幻想世界の描写は見事である。詩人の約四十年前の作。

根津真介詩集『余所事』（土曜美術社出版販売）を読む。「越冬」を引く。

季節はずれのツバメが二羽／我が家の周りを彷徨する／連れ合いを見つけるのが遅すぎたのか／一度産んだ卵を蛇に獲られたか／／もう南へ下る時機は逸した／今から卵を孵化させるには遅すぎる／我が家の軒先ならいつでもレンタルしよう／冬を越せる寝床だけはしっかりと／／僕らも出会うのが遅すぎた／一人っ子を輪禍にとられ／もう、どちらが先に逝くかわからないが／後の始末はあなたにお任せよと／未来のことはケセラセラと笑い合う／／狩の仕方も忘れたか／雪を虫と間違えてか／夫婦交互に曇天に向かって飛び出していく／暗くなったら巢の中で温め合つて

作風はどこか飄々としている。そんな持ち

味を持つ詩人だが、切実な十人十色の来し方行く末をこのように「ツバメ」に仮託してさりげなく描く。これもまた秀逸だ。

三宅鞠詠詩集『夢どりかえばや』を読む。

「反対言葉の手紙」を引く。

生まれた産婦人科病院で新生児の取替があった／私が生まれた産婦人科病院で／私の本当の母親と嘘の母親は同室だった／嘘の母親は自分が産んだ女兒を置き去りにして／私を連れて退院した／私は嘘の家で育ったけれども／私には本当の家があった／私の本当の家には／本当の祖父と本当の両親と本当の兄や姉がいた／嘘の家には／嘘の祖父と嘘の両親とのちに嘘の弟が生まれた／嘘の母親は私の本当の家に雇われて乳母になり／自分が産んだ女兒を自分の手で育てたけれども／嘘の祖父が放られていた私を育ててくれた／嘘の母親は私の名前を騙って手紙を書いた／私の本当の兄はその手紙に騙されて／嘘の母親が書く手紙を高額で買い取り／私の調査を始めた／その手紙を私は書いていない／その手紙は反対言葉で書かれてあったけれども／私の本当の兄は分かってくれたらどうか？

作者は、あとがきでこの詩集を「虚構」だ

と言う。かつてロシアのシクロフスキーが提唱した「異化」という言葉が浮かんだ。慣らされ、日常化した知覚から潜在化した本来の感覚を呼び覚ます文学手法のこと。詩集は多く事実の向こうの真実を見つめるが、三宅鞠詠の「切実」が読者に迫る。

伊藤久美子詩集『伝言』（編集工房ノア）を読む。「宵闇」を引く。

ようさり やで／はよ おうちに はいり
なはれ／ようさり とは「夜」の進行
形であり／夜がくる よりも／闇がしのび
よる／祖母の語感はどうだった／ようさり
／さり さり さり／薄墨を刷くように／
闇が濃くなってゆく／祖母の姿がおぼろに
なって／闇に托けてゆくようにたよりなく
／いつもその言葉を聞いた／電球から垂
れた紐を／ぱちと／ぱちと／やわらかに
黄ばんだ光がともり／祖母の横顔がうか
んで／ほっとする／ようさり のあとか
ら／しじまが ゆっくりと／やってくるの
だった

現代の都市生活は闇も静寂も知らない音と光のなかで営まれる。「ようさり やで」という言葉に宿る原初の闇への怖れこそが生きる営みの尊さに繋がる。詩人の立ち位置だ。

「アリゼ」210号は、今年四月に逝去された林堂一さんを偲んで巻頭から三七頁までを「追悼・林堂一」として特集している。以倉紘平、栗原滯子、池下和彦、河崎良二、柳内やすこ、田代久美子、相野優子、宮地智子、塩寄緑、楡りふか、松井博文、鮑浦敏の各氏が渾身の追悼文を寄せている。特集されている十数篇の詩の中から「繭」を引く。生きることの無常と向き合う林堂さんの精神が見て取れる。ご冥福をお祈りしつつ。

時間の縁から手を離れたかのように／きみ
たちは自分のなかにはいり／つぎつぎ繭に
なる／ありがと／軽い促音を語尾に残して
／闇が降りてくると／うっすらと光り始
める繭のなかに／まだ きみたちを認める
ことができる／桑の葉のなかで／しばし
むつみあった／ただそれだけのみじかい縁
であった／時間のなかに時間を失うとき
が／我輩にもきた／さようなら／きみた
ち／蟻よ、あおむしよ、蟬たちよ／さらば
だ 昆虫諸君／しばしの別れだ／また会
おう

今回の詩時評の冒頭に、大澤真幸が師と仰ぐ見田宗介さんの死を悼む文章の中から言葉を引いた。敬し愛する人の死の悲しみは一時間のなかに時間を失う」故か、見事な詩だ。